

上っ面の言葉を 解釈されると困るのです

「楽して大豆を作りたいからです」
本音で言ったつもりだったが、多くの聞き手の感性は私の理解を超えるものだった。

2004年に新聞においてGM（遺伝子組換え）大豆を作りたい！との記事が掲載され、多くの農業関係者から大反発されたことは何度か話をしたが、今までの、かいつまんだ内容から少し私の本音を精査できるものにしていきます。

GMをやりたい理由、冒頭の言葉に間違いはないが、反対派の牙城の一角である「元・少女時代」には間違いなく誤解を与えてしまった。

私の言う「楽」と元・少女時代の「楽」は同音異義語である。私は将来の規模拡大の準備のために排除できる作業、思想、文化は取り除き、生産のみに集中するため、と言う意味で発言した。ところが元・少女時代のほとんどは農業の現場とはかけ離れた社会に存在し、農産物を多く生産することを忌み嫌う、左翼的な思想のグループである。彼女たちは「楽」とは与えられた仕事を怠けてやろうとする怠惰な行ないをするこの「楽」と捉えたようだ。

そのような北海道に多い元・少女時代とシンパシーの波長が合うのは、現場に出ることに興味のない、ひと皮むけきつていない高学歴の理論集団か、生産物を多く作ることに興味ない生産者たちである。

何度も言うが、私があのように言うのは規模拡大して2倍の面積になっても2倍の時間働くことは無理だからだ！だが農業で生き延びるのは規模拡大しかない。増加率が1%であるか200%になるかは大きな問題ではない。少なくともこの小さな町においても絶え間なく規模拡大の波は押し寄せて来ていて、約20年で経営規模は2倍になっている。

ましてこれから5倍、10倍の規模になった時に、今の大豆栽培技術には限界があります。今10haや20haの大豆栽培をしている生産者が既存のやり方で、今年から100haできると思いますか？それは無謀な挑戦であり、**農業とギャンブル**を取り違えています。

300馬力のトラクタは3000

私がGM大豆を作りたい理由

Vol.45



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョーンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

万円、560馬力のコンバインは5000万円です。でも、2倍の面積になった場合のマニユアルが存在しません。技術に蓄積が必要なのは自動車、新幹線、航空機、原発など戦後の発展を見ればわかることです。ところで生産者が集まって勉強会って存在すると思いますか？この30年間、1度もありません。確かに一部の生産者が呼ばれる「何とか協議会」は存在

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

しますが、全員が共通の情報に触れているとは決して思いません。この技術の蓄積を数値化しなかった北海道農業の愚かさの責任を、きつと生産者は将来負うことになるでしょう。

だから小さな農家が大切なのだ！
と言う元・少女時代の主張に耳を傾けない訳ではないが、それは大ウソだと共産主義の歴史が物語っている。

特に彼女たちは自分たちの親たちが農家出身である場合、農村社会から出された負い目があるのでしょう。規模拡大する生産者からはマトモに相手にしてくれなくても、チョイ小農、チョイ貧農とは根っこ部分は同じですから、「このような生産者の思想を変えてやろう、そうだと変えられる！」と思っているから癖が悪いのです。声を大にして言いたい。「お前たちの方が人間を組織しようとしているではないか？」

ところで元・少女時代って？ おばちゃんとは書かないところがフェミニスト宮井たる所以である。

泥炭層・粘土層での プラウ耕考

ここからはGMの真骨頂を示していくことにしよう。大豆栽培において一番の敵は雑草である。その雑草の中でも大豆と同じ外見の広葉タイ

ブの雑草にはホトホト泣かされ、この広葉の雑草をコントロールできれば大豆栽培の80%は成功と言えるだろう。長沼の多くの大豆栽培は元々、河川や沼の水位が下がり、数千年間そこにあつた草木、雑草からできた泥炭層や粘土層を耕作可能な土にした、先人たちの努力と苦悩を乗り越えた成果がある。

つまり泥炭層や粘土層は本来であれば畑作には向かない土と言えるだろう。だからプラウで深く耕したら雑草は少なくなる、ということはあるから言われていて、事実、父親は耕作が始まった1970年からこのプラウでの作業を夜遅くまでしていた。その結果、特に**泥炭層の場合**はプラウをやればやるほど地盤低下が謙虚に表れた。

ある場所では水田をやめて、大豆、麦の転作をしてから20年間で隣の水田から30cm以上上がった場所もあった。標高が6mのこの土地だと、まだ将来の話になるかもしれないが、海岸線沿いのもっと標高が低い場所でも相対的に水位が上がった場合、どのようになるかは東日本大震災を見れば明らかなことである。

神のいたずらか、それとも祖先様の教えを聞き逃したのか、わずか数m、数cmで人の生き死にが分かれることがある。日本の国土である農地

の標高を下げることは大地への挑戦なのか、それとも自然からの啓示を無視する背徳行為なのか、そして本当に国益にかなっているか考える余裕や時間は、日本人に与えられているとは決して思わない。

地盤沈下をさせない不耕起、簡易耕で表土をいじらなくても、GM大豆とラウンドアップやバスタの組み合わせで営農できれば、国土保全の意味からも良いと思うのだが。

誤解してしまう方もいると思いますが、プラウを批判しているのではなく、もしプラウがなかったら北海道農業は瀕死の状態だったかもしれない。標高が10m以上ある岩盤や火山灰の蓄積させた農地では、最高の作業機であることは間違いないし、私の周りを見ても、以前の様に20cmの反転するプラウは止めて、浅めのプラウ耕をすることにより地盤低下を抑えている努力をしているのも事実である。

ただ泥炭地帯や海抜の低い地域ではリスクがあり、正直言ってプラウ作業は**カッターイ**のです。年を重ねることに気が短い性格は緩和されているようだが、プラウの作業のために畑の隅々でトラクタの速度を抑えて方向転換はとも気分的に良くない。トラクタにはクラッチは付いているが、最近のシステムはそれを

踏まなくてもギアチェンジができるようになったが、たかが100haの土地をグルグル回る作業は基本的に明るい農村的には減入ってしまうことが多い。

まっ、ここまでは5年後の長沼町開基120周年の記念誌にでも出てくる話ではあるので、話をGMに戻そう。広葉と呼ばれる雑草をコントロールするに除草剤ベンタゾン（バサグラン）がある。麦や水田の広葉コントロールにも使用されているが、多くの大豆にも葉害の影響を与えてしまう。

自然界がすごいのは、同じ大豆栽培をしても緯度が低くなると、例えば関東以南であれば太陽を十分に受け取れるので広葉雑草よりもイネ科の雑草が多くなるが、選択的な除草剤であるナブ、セレクト等が葉害もなく使用できるが、東北から北へ緯度が高くなるにつれて、大豆畑の広葉雑草の占有率が高まる。これは大豆生育期間中の自然界の営みであり、雑草の生きる知恵であることは間違いない。

逆を言えば、北海道の麦栽培は広葉をコントロールしやすいが、南の地方の麦栽培はイネ科雑草の対策が大変と言うことになる。となると南の地方ではRR小麦の登場が待たれるということなのだろう。